

## 書 評

『信州に上医あり—若月俊一と佐久病院—』 南木 佳士 著 岩波書店(新書)  
定価620円 219頁

手島 繁一(協同総合研究所常任理事)

著者の南木さんは長野県の佐久総合病院に勤務するお医者さんである。彼のもう一つの顔は小説家であり、1989年1月に『ダイヤモンドダスト』(文芸春秋、1989年)という

作品で第100回芥川賞を受賞している。

本書の表題にある「上医」とは中国の古典「国語」の一節から取った言葉であるが、ここでは佐久総合病院の院長である若月俊一さんのことをさしている。

南木さん自身も述べているように本書の目的の一つは「若月が指導者となって築き上げられ、今では農村医療、地域医療のメッカとして広く知られている佐久総合病院の歴史と現状をふまえてその点を検証する」ことにある。この点では本書はこれまでもいくつか出されてきた若月と佐久病院に関する書物の延長線上に位置付けられるものであり、佐久病院とその活動についての最も新しい情報を提供するものとして有益であろう。

佐久病院はもともと農協立病院でありながらも、現在では佐久平一体の総合的な医療保健衛生活動のセンター的役割を果たす医療施設となっている。佐久病院が展開している先進的な地域医療活動については、同じ佐久病院の職員であった依田発夫さんが編んだ『在宅ケアの活きるまち』(自治体研究社1991年)に詳しい。

さて南木さんが本書を執筆したもう一つの目的は、人間若月俊一を描くことにあった。その視点は若月さんの業績を「無批判に讃える」のではなく、医療というそもそも矛盾に満ちた活動に携わることで見えてくる「真の人間性」を描きだそうとするものである。この点では、本書はこれまでの類書とは違った面白さに満ちている。

南木さんがそもそも佐久病院に研修医として飛込んだのは、今や古典となった若月さんの『村で病氣とたたかう』(岩波新書、1971年)に感動したからであった。だが、佐久病院での経験のなかで、南木さんは若月さんに対して次第に複雑な感情をもつようになった。

そして、彼は1981年に若月俊一と「再会」する。「出会いの場」となったのは、彼が難民医療日本チームの一員として出かけたタイの難民キャンプであった。タイの農村で巡回診療に従事し、疲れ切って何気なく貧しい農村風景を眺めているうちに、南木さんの胸にある一つの想いが急速に膨らんできた。少し長くなるが感動的な一節なので引用しよう。

「もしかしたら、昭和20年3月に東大から信州の田舎町に赴任した若月が見た農村風景もこれと似たようなものだったのではないだろうか、と。貧しいタイの農村を前にして絶望感しか抱けなかった私は、これと同じような状況の戦後の信州の農村で、文字通り『病氣とたたかった』若月のバイタリティーに率直に脱帽した。それまでの私は若月に対して、佐久病院の職員の一人としてその外面の良さと内に向ける管理者としての顔のあまりにも差異のあるのをあげつらって、陰で批判ばかりしていた。佐久病院院長としての若月は私のようなひねくれた部下の目には、ワンマン経営者とししか映らなかったのだ。もしあの時点でタイの農村を見ていなかったら、今日でも私の若月像は変わらなかったろうし、本書を書く気にもならなかっただろう。」

森鷗外に始まって、我が国では医者とは小説家の一大水源なのであるが、「二足のワラジ」をはいている人はまれである。南木さんがその珍しい存在であり続けているのは、彼が若月さんと佐久病院に惚れ込んでいるからなのである。